

聖書：ヨハネの黙示録 12：7～18

説教題：地に投げ落とされた竜

日時：2021年5月9日（朝拝）

ヨハネの黙示録は 12 章から新しいサイクルが始まり、ここは黙示録を理解する上でカギとなる中心的な幻であると多くの学者が述べていることを前回申し上げました。前回の 1～6 節は、この幻の導入部分で、ごく簡単に振り返ると 1 節の「一人の女」とは神の民・教会のことでした。その教会には救いの約束が与えられていました。基礎となるのは創世記 3 章 15 節のいわゆる原始福音と呼ばれるものです。女から出るやがての一人の子孫（すなわちメシヤ・キリスト）を通して、神はご自身の民を救うと約束くださいました。旧約時代はその救い主の誕生を待ち望む産みの苦しみの期間にたとえられる時代でした。サタンはこの女から出る一人の子を殺し、それによって神の救いの実現をぶち壊そうとしました。ところがその救い主は定められた働きをなし終えて天へ上げられました。この出来事を宇宙的な視点から語り直したのが今日の 7～12 節です。7 節前半：「さて、天に戦いが起こって、ミカエルとその御使いたちは竜と戦った。」

ミカエルという天使はダニエル書 10 章や 12 章に出て来ます。ダニエル書 10 章 13 節で彼は「最高位の君の一人」と言われています。そのダニエル書 10 章を読むと、この世の国々の戦いや歴史の背後には、私たちの目には見えない霊的な世界における戦いがあると言われています。具体的にそこではバビロンに代わって世界の覇者となったペルシアの上に神に逆らって立つ天使的存在がいて、その天使とその国からイスラエルを守るためにミカエルが働いていたと言われています。そしてダニエル書 10～11 章にかけて世界の今後の成り行きが語られた後、12 章 1 節に「その時、あなたの国の人々を守る大いなる君ミカエルが立ち上がる」と言われていました。その箇所と今日の箇所は深い関係にあると考えられます。

では今日の箇所最初の 12 章 7 節～9 節は何を言っているのでしょうか。それはイエス様の十字架と復活のみわざは単なる地上的な出来事ではなく、天上の世界における意義をも有しているということです。私たちの生活は私たちの目に見えることによってだけ説明できるものではありません。私たちが目で見ている世界は、私たちの目には見えない、その背後にある霊的な世界と深いつながりがあると聖書は語っています。

その霊的世界における大きな変化がここに述べられているのです。その変化とはミカエルとその御使いたちが、竜およびその使いたちと戦って勝ち、竜とその使いたちは地に投げ落とされたということです。これはミカエルが強かったと言うよりは、主のみわざゆえのことです。イエス様の地上における十字架と復活のみわざは、直ちに天における変化をもたらした。それが天では最高天使の一人ミカエルを通してなされたということです。その結果、サタンは天にいる場所がなくなり、地に投げ落とされた。

これはどういうことでしょうか。これは反対から言えばサタンはそれまで天にある種の位置を持っていたということです。キリストの勝利までは天の場所に現れることを許されていた。その具体例をヨブ記 1 章やゼカリヤ書 3 章に見ることができます。10 節でサタンは「昼も夜も私たちの神の御前で訴える者」と言われていますが、サタンは神の前に現れて、「この人はこのように罪ある人間だから、祝福を受けるべきではない。義なる神であるあなたは、彼らを直ちにさばくべきではないか!」、このように告発していました。その彼が天から投げ落とされたと言っています。これは人間の目には見えないことです。しかしイエス様の目は見ていました。ルカの福音書 10 章 18 節でイエス様は「サタンが稲妻のように天から落ちるのを、わたしは見ました」と言われました。なぜもはや天に竜とその使いたちのいる場所がなくなったのでしょうか。それはキリストが十字架の死を通してご自身により頼むすべての人の罪を代わりに担い、救いに必要な代価をすべて払ったからに他なりません。サタンはイエス様が地上に誕生された後、罪を犯すようひっきりなしに仕向けましたが、イエス様は最後まで罪を犯さず、その聖く、無限の価値を持つご自身のいのちを身代わりとしてささげました。その死において、罪人を救うための完全な代償を支払い、律法を満たしました。そのためサタンの訴えは意味のないものとなりました。ローマ人への手紙 8 章 1 節：「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」 33~34 節：「だれが、神に選ばれた者たちを訴えるのですか。神が義と認めてくださるのです。だれが、私たちが罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。」 こうしてサタンのあらゆる訴えは退けられ、サタンはその場所から追い出されたのです。ヨハネの福音書 12 章 31 節：「今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。」

続く10～12節の天で起こった大きな声は、この出来事の意義を説明するものです。10節に「今や、私たちの神の救いと力と王国と、神のキリストの権威が現れた」と言われていますが、ここはほとんど説明が不要かと思えます。サタンが天から引きずり降ろされ、投げ落とされたことによって、神とキリストの勝利は決定的なものとなりました。まだその最終状態に達したわけではありませんが、ここに神の王国、キリストの王国が真に始まったのです。11節には信者たちの勝利が歌われています。彼らの勝利は何と言っても第一に子羊の血によります。イエス様が十字架上で流された犠牲の血が彼らに救いをもたらしました。ヨハネの手紙第一1章7節：「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」また勝利の第二原因として「自分たちの証しのことばのゆえに」とも言われています。イエス様が流された血による救いを自分のものとするには信仰告白が必要です。その信仰告白をもって証しすることの力がここに言われています。サタンはこのことを言ってほしくないのです。キリストの十字架がサタンを敗北させたことをなるべく人々に伝えてほしくない。ですからもし私たちが口をつぐんでキリストの福音を語らないなら、それはサタンが喜ぶことに加担し、サタンの国を広げることにつながります。しかしキリストの勝利を証しする時、私たちはサタンに打ち勝つことができるのです。11節最後の「彼らは死に至るまでも自分のいのちを惜しまなかった」という部分は、彼らが主を証しする歩みに忠実に生きたということです。この世における自分のいのちを愛するより、主を証しすることを大切にし、主がくださる真のいのちに生きることを優先して選び取った。

それゆえ、12節に「天とそこに住む者たちよ、喜べ」と歌われます。一方で「地と海はわざわいだ」と語られます。続くところに「悪魔が自分の時が短いことを知って激しく憤り、おまえたちのところへ下ったからだ」とあります。サタンも自らの敗北が決定的になったことを知りました。しかしだからと言って彼は戦いをやめません。むしろ地に投げ落とされた彼は、二度と天に上って自分の思う通りに世界を支配することができなくなったので、憤りに満ちて地上に残された教会を迫害することへ向かったと言われています。「自分の時が短いことを知って」とある通り、彼も残された期間が限りあるものであることを知っています。そのために一層激しく憤り、死に物狂いで教会を攻撃し、最後の悪あがきに出始めたのです。

最後の13節以降は、その悪魔による教会への迫害のことです。13節に「竜は、自分が地へ投げ落とされたのを知ると、男の子を産んだ女を追いかけた」とあります。

しかし 14 節はそんな教会に与えられる神の守りを述べたものです。「大きな鷲の翼が二つ与えられた」とありますが、これは出エジプト記 19 章 4 節の次のみことばを下敷きにしたものです。「あなたがたは、わたしがエジプトにしたこと、また、あなたがたを鷲の翼に乗せて、わたしのもとに連れて来たことを見た。」あるいは申命記 32 章 10～11 節：「主は荒野の地で、荒涼とした荒れ地で彼を見つけ、これを抱き、世話をし、ご自分の瞳のように守られた。鷲が巢のひなを呼び覚まし、そのひなの上を舞い、翼を広げてこれを取り、羽に乗せて行くように。」いずれも荒野を旅するイスラエルを優しく、安全に守ってくださった神の守りを象徴する表現です。その後の「一時と二時と半時の間」とは、前にも見ましたが、「一時」を一年とすると合計で 3 年半となり、6 節で見た 1260 日と同じ期間になります。それは 11 章 3 節で見た 1260 日とも同じです。それらを参照すると、この期間はイエス様の昇天後、教会が宣教する期間を指していることが分かります。つまりヨハネの時代から世の終わりまでの全期間を指します。

そんな教会を攻撃するために 15 節に「すると蛇はその口から、女のうしろへ水を川のように吐き出し、彼女を大水で押し流そうとした」とあります。これは何でしょうか。これは蛇が「口から出した」と言われています。黙示録において口から出るものはことばとその力を表します。1 章 16 節では「キリストの口から鋭い両刃の剣が出ていた」とあり、それはキリストのことばが両刃の剣のような力を持つという意味でした。11 章 5 節で教会は二人の証人にたとえられ、彼らの口から火が出たと言われましたが、それも教会が語る神のことばの力を表すものでした。ですから蛇の口から出る川のような水も、蛇のことばとその力を意味していると考えられます。それはどんな言葉でしょうか。それは偽りのことば、あるいは 9 節のサタンについての表現を用いれば「惑わすことば」と考えられます。参考になるみことばとして詩篇 144 篇 7 節に「大水からまた異国人の手から私を解き放ち、救い出してください」とあり、8 節に「彼らの口は嘘を言い、その右の手は偽りの右手です」と言われていることです。大水は彼らの嘘、偽りを指しています。イエス様はマタイの福音書 24 章 11 節で、終わりの日には「偽預言者が大勢現れて、多くの人を惑わします」と言われましたし、同章 24 節で「偽キリストたち、偽預言者たちが現れて、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうと、大きなしるしや不思議を行います」とも言われました。実際、この黙示録でも、最初の方で見たアジアの 7 つの教会への手紙の中で、ニコライ派の教えとかバラムの教え、偽りの女預言者イゼベルのことばに惑わされている人たちのこと

が述べられていました。このような偽教師や偽りの教えを次々に送り出して、洪水のように教会を押し流そうとサタンは図るということでしょう。

しかし 16 節に神は教会を助けて、地が「口を開けて、竜が口から吐き出した川を飲み干す」ようにされたとあります。思い起こすのは民数記 16 章のコラとダタンとアビラムのことです。彼らはモーセに逆らい、イスラエルの全会衆を誤った方向へ導こうとしましたが、彼らの足元の地面が割れ、コラと彼に属するすべてのものは生きのまま地に飲み込まれました。あのようにして神は偽りと偽りを語る者たちから教会を守ってくださることが言われていると考えられます。

悪魔である竜はこのことで激しく怒り、17 節では女の子孫の残りの者たちと戦おうとして出て行ったとあります。ここで地上の教会は「神の戒めを守り、イエスの証しを堅く保っている者たち」と表現されています。竜は何をしようとしたのでしょうか。18 節に「そして、竜は海辺の砂の上に立った」と記され、彼のしたことが次の 13 章に記されます。それは次回見ます。このようにして教会と竜との戦いはなお続くのです。それは今日の私たちにも当てはまることです。

そんな私たちが今日の箇所から覚えないことは、約束の女の子孫イエス・キリストはこの古い蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれる者に、十字架と復活を通して今や決定的に勝利したということです。悪魔はすでに地に投げ落とされた。勝負はそこでついたのです！であるならなぜ戦いが続くのでしょうか。良くたとえられるのは、第 2 次世界大戦中に行われたノルマンディー上陸作戦のことです。当時、西ヨーロッパはドイツが支配していました。しかし 1944 年 6 月 6 日に連合軍からの兵士が一日だけで 10 万人以上（最終的には約 200 万人）、フランスのノルマンディー海岸に一気に上陸します。この上陸成功により、この日をもって連合軍側の勝利は決定的になりました（いわゆる D-Day）。しかしこのことは戦いがすぐ終わることは意味しません。それから数か月間、各地で血を流す戦いが続きました。しかし繰り返しますが、勝負はすでにあの日をもって付いたのです。私たちも似たような状況にあります。キリスト対サタンの戦いはすでに決着が付きました。キリストが決定的に勝利し、竜は地に投げ落とされました。このキリストの勝利を喜び感謝しつつ、このキリストの勝利に立ってなお戦うことが教会に求められています。その方法とは 11 節にあったように、子羊の血により頼むことです。キリストの身代わりの十字架こそが罪ある私を救う十分なも

のであることを信じ、このキリストにこそより頼むことです。またそのことを自らの口をもって告白し、人々に宣教することです。たとえサタンが様々な手を尽くして教会を攻撃し、その働きを妨害しても、それはサタンが力強いことを意味しません。むしろ私たちはそこに、サタンは決定的に敗北したから、負けが決まっているから、一層死に物狂いになってそうしているのだと見るべきです。それは敗北者の最後のあがきに過ぎないと。そのことを見て取って、キリストの勝利を感謝して告白し、これを証しし続ける教会の戦いへ導かれたいと思います。17節に言われた通り、神の戒めを守り、イエスの証しを堅く保つ女の子孫の残りの者たちとしての歩みを忠実にささげ、神の不思議な御手によって守られ、最後の救いに入れられる神の民・教会の歩みへ導かれたいと思います。